



発行所
日本海区水産研究所
印刷所
第一株式会社 印刷所

日本海

北日本砂丘漁村

内橋潔

日本海側の石川、新潟、山形、秋田、青森などの地方には、雄大な砂丘があつて、荒涼とした景観を呈している。こうした砂丘に小さな集落が点散しているが、一体何を生業にして、生活を営んでいるのかと不思議に思われる。

ところが集落台帳をみると殆どが漁村となつてゐる。漁村とか半農半漁村と云つたところで、港がある訳でもないし、海に良い好な釣場がある訳でもない。又陸地には集落の近くに門内農業式の耕地が若干ある程度である。

かつては地曳などによつて、相当の生産を挙げることも出来たので、漁に依存してい

た日もあつたであろうが、今日では漁村などと云う呼び方は伝承の頃となつてゐる。こんな名のみの村々は、なにかにつけて極めて恵まれていないことが相違じて、こうした村々は、一体どうしたらよいの

であろうか。先ず実態を知ることが必要だと云うことで、調べてみると、注目すべき幾多の事實がわかつて来た。その内、北日本海の砂丘漁村に通じていることは、村にそれ自体には、人々の生活を支えるような生産が殆どないので、出稼の村と化していることである。生産がないのは、砂浜の海であり、砂丘の陸地であつて、大きな自然に全く制約されているからである。

砂丘の海の高度利用など考えられ相もないが、砂丘の陸地を高度に利用することによって、沿岸漁業のようないわゆる漁業が、漁具、漁法等に相應するものである。漁業協同組合や漁業生産組合が設立されて、漁業制度改革が断行され、新たな漁業計画と新免許によつて地元の漁業の活性化が図られる。これが無関係に興亡するものではない。従つて地方によって対象漁種、漁場、漁具、漁法等に相当の差異があるわけであるが、不幸にして私たちは日本海北部諸県の実状をよく知らないので、標題のよくな「日本海」の沖合漁業の発展策を論ずる資格はない。

今後における日本海の沖合漁業の発展は将来どのようにしたらよいか

神藤正

て、若干の考察を試みるにとどめたい。

山陰沖合海域は本土に連なる広い大陸棚の先端に隠岐島を擁して、ここに水深二〇〇米線が迫り対馬暖流も深部固有冷水もこの線に沿つて消長盛衰を示し、又隠岐島を中心にして、西に神勝堆、竹島、北に隠岐海嶺、北東に隠岐堆と一連の魚礁があり、

村などは、農業への転換を一段と推進すべきであろう。

(日本水研所長)

これと本土との間に一万平方浬に及ぶ優秀な漁場を形成し、イワシ、アジ、サバ、イカ、ブリ、サンマ、シイラ等の遊魚が夫々の季節に来游するは勿論、沖合魚礁附近一帯の海域にエビ、カニ、カレイ、ハツメ、スケソウ等の底棲魚類が豊富に分布している。ところで沿岸漁業の不振が問題になつものであるが、遠洋漁業が国際的な制約を受けて、足踏みを余儀なくされるに及んで、沖合漁業の重要性は倍加された感がある。

もともと沖合漁業は沿岸漁業から発展して来たものであるから、遠洋漁業のようないわゆる漁業が、漁業の高度利用による漁業生産力の発展と並んで、漁業の生活安定に基く経済的社会的地位の向上にどれだけ役立つたかは疑問である。だが然し漁民の自由な意志によつて漁業協同組合や漁業生産組合が設立さ

れていた。行政面では漁業制度改革が断行さ

れたものであるから、遠洋漁業の

スケソウ等の底棲魚類が豊富に分布してい

る。ところで沿岸漁業の不振が問題になつて来たのは戦後魚類の統制が解けはじめた頃からであり、ここ数年は全く行詰りの状態となつてしまつたが、底曳漁業は既にそ

主なる項目 - 第71号 -

- ・北日本砂丘漁村
- ・今後における日本海の沖合漁業の発展は将来どのようにしたらよいか。
- ・底魚および沿岸資源調査担当者会議イワシ研究終過報告(第4号)
- ・米の渡來と漁業
- ・昭和31年を回顧して

内橋潔 神藤正 濱田正治
内橋潔 神藤正 濱田正治
内野下加 橋口村藤

れ、団体の力によつて必要な資金を獲得し生産の共同化によつて沖合漁業へ進出发展した事実は新制度の功績として認めないわけにはゆかない。少くとも島根県においてはこれによつて五割の増産が実現されたのである。

さてそれでは山陰地方で実際にどんな沖合漁業が行なわれているかといううに先ず機船巾着網、和船巾着網、機船底曳網、フカ延繩、シイラ旋網サンマ流網の六つを挙げる。これができよう。このうち機船巾着網は沿岸漁業行詰り打開の為といふよりもむしろ他県船の進出に刺戟されての奮起であり、和船巾着網は從来島根県には全然無かつたものを四張網不振の転換策として愛媛県及び宮崎県から導入した新興漁業である。名前は「和船」であつても中短波、超短波の無線機を備えて沖合四〇浬にイワシ群を追う立派な沖合漁業である。機船底曳網は全国何處にもある漁法であるが、二艘曳は本県が元祖と云われ、そのため産業労働者として勲章をもつた人もある程で、現在は東経一・二八度三〇分までの中間漁区に多く入漁して成績を上げているが李ライン附近で掌捕の危険にさらされるよりも自県の沖で深海底曳をやつた方がよいと云う奇特な漁業者もいるので、試験場が日下盛んに漁場開発調査をやつている。フカ延繩とシイラ旋網は本県で昔から行われている漁法であつて、沖合漁業と云つてよいかどうか解らないが、近年は船も大型になり三〇浬以上の沖合で操業するので名前を挙げたままである。又サンマ流網は從来隱岐島周辺で小規模に行なわれていた沿岸漁業の一種であるが、スルメイカの不漁に伴い大型船に切換えて遠く三〇一四〇浬の沖合へ出漁するようになり、沖合漁業の地位を獲得した

ものである。以上を通観するに本県沖合漁業の花形は巾着網漁業機船、和船)と底曳網漁業の二つであつて、事実この二つの漁業による漁獲高合計は一、六四七万貫で、県下全漁獲高二、九五五万貫の過半を占め、多數漁民の沿岸漁業より遙かに優位にある。

然しながら機船底曳網漁業は既に久しい以前から整理の段階に追込まれており、漁獲が安全確実なるが故に漁師を保つている程度で、資源的にも漁場的にも頭打ちの状態にあることは周知の事実である。この現状を開拓するには朝鮮東海岸、沿海州方面に進出するか又は自県沖合で新漁場を開拓する以外に方法はないが、隱岐の五箇村の一部である竹島に外國軍隊が駐屯しレーダーと無線と大砲によつて接近を拒んでいる現状では、李ラインを越えての進出は望み難い。従つて新漁場の開拓は刻下の急務である。島根県水試はさきに隱岐北方海嶺の開拓に着手し、水深二〇〇メートルから四〇〇メートルの海域にエビ、カニ、カレイ、ハツメ、スケソウ等有用魚族が多量に棲息し、底曳網漁業が企業的に可能なる事を明らかにした

が、今また東経一三二度線に沿う石見沖合の深部を調査中でこれも有望と折紙が附けられている。次に巾着網漁業は本県だけではなく、今一千萬貫以上の漁獲を上げているが、膨大な資金を必要とする上に漁獲が不同で各船間に大きな開きがあり、最近では伏採する者さえ出てくる有様である。漁業者の重要な関心事は魚群はいつどの辺に遊して来るかと云う当面の問題と日本海のイワシ、アジ、サバ資源は今後どう変化していくかといふ将来の問題である。吾々は当面の問題に対しても十日日毎に海況予報を配布して、各船の向う処を明らかにして、どう

対しては資源調査を行なつてはいるものの返答できない状態である。本年六一七月の交に数十浬の沖合を大羽イワシの大群が移動していたし又サバも最近濃群をなし、又隠岐北方沖合を洄游していた事実が確認されているので資源の面の懸念はあらうが、常時における魚群探査と迅速な連絡によつて、山陰沖合百浬一帯が巾着船の漁場となる事もあるまい。又この方面的サンマ漁網も有望であろう。

ともあれ、近年各県が、自県の沖合に新開拓する以外に方法はないが、隱岐の五箇村の一部である竹島に外國軍隊が駐屯しレーダーと無線と大砲によつて接近を拒んでいる現状では、李ラインを越えての進出は望み難い。従つて新漁場の開拓は刻下の急務である。島根県水試はさきに隱岐北方海嶺の開拓に着手し、水深二〇〇メートルから四〇〇メートルの海域にエビ、カニ、カレイ、ハツメ、スケソウ等有用魚族が多量に棲息し、底曳網漁業が企業的に可能なる事を明らかにした

が、今また東経一三二度線に沿う石見沖合の深部を調査中でこれも有望と折紙が附けられている。次に巾着網漁業は本県だけではなく、今一千萬貫以上の漁獲を上げているが、膨大な資金を必要とする上に漁獲が不同で各船間に大きな開きがあり、最近では伏採する者さえ出てくる有様である。漁業者の重要な関心事は魚群はいつどの辺に遊して来るかと云う当面の問題と日本海のイワシ、アジ、サバ資源は今後どう変化していくかといふ将来の問題である。吾々は当面の問題に対しても十日日毎に海況予報を配布して、各船の向う処を明らかにして、どう

底魚および沿岸資源調査担当者会議

イワシ研究経過報告(第4号)発表

第五日は東京水大名譽教授田内博士、九大教授相川博士も出席して日本農林技術会議、各水研(除淡水研)統計調査部等六十名が参加して開催された。特に

十一月二十六三十日の五日間 新潟市
日本水研で全国水研担当者会議が水産庁、農林技術会議、各水研(除淡水研)統計調査部等六十名が参加して開催された。特に

農林水産技術会議花岡
調査官
(3) 通管委員会報告
議事
。(3) 通管委員会報告
(4) 底魚担当者会議
議長(午前 小鶴技官(北海道)
佐藤技官(北海道)
(5) 横井技官(北海道)
(6) 各水研経過報告
(7) 底魚資源研究シンポジウム
(8) 各海区底魚漁業の現状

なおこの経過報告は、出席各研究者の討論の結果をとり入れて若干の修正を加え、日下上げをおこなつており、来る二月下旬には正式完成の見込みである。

会議次第
。(1) 議長(午前 木村所長(東北)
佐藤技官(北海道)
(2) 前日に引き続き
(C) 調査の目的について
(D) 調査の成果について
(E) 今後の調査について

。(2) 開会の辞 日水研資源部長
(3) 接拶 日水研所長
水産庁阿部企画官

あるとの意見がなされた。但し西海区は漁況の予察、漁場開発等は業者の要望がないとして資源変動の解明、生態の把握等に主力をおくべしとの意見を提出した。

現在の底曳が乱獲のおそれがあるかとい

う点については、「乱獲」という言葉自身の意味の不明瞭な点がまず指摘され、北海道、日本海から

は、現在の漁業は魚を小網にしては魚を小網にしてはいるが、根絶やしにする危険があるという

所まで行つて、いらない」という発表があり、さらに北海道からは漁船數を徹底的に整理して若年魚にかかる漁獲強度を低下したため資源が回復のきさしが見えた例のことがあると報告された。

西海区は「乱獲」はまだ見られず、漁獲の変化はむしろ漁場の変化であると発表し、南海区は漁獲行為が魚種純成に与える影響について注意を促した。

第三回 資源調査懇談会

(3) 午前 横田技官(南 海)
午後 中井技官(東 海)

(4) 単位当漁獲量の意義について
栗田 晋(東 海)

(3) 其他

このうち(3)の用語記号の統一について

会と併せて東京で開催することにする。尙次回のプログレス・リポートの担当は北水研の予定であつたが、機構問題の起ること

午後 底魚漁場形成と環境要因について
木村喜之助(東 北)

(1) 日、東京で委員会を開いて決定
以上の各発表のうち

(2) 資源研究に用いられる相似計算器について
土井 長之(東 海)

(3) 資源調査に用いられる用語と記号について
土井 長之(東 海)

(A) 明年リスボンで開催予定の北大西洋洋漁業ボビュレーション・ダンディナミック委員会への資料提供の依頼について

(B) 統計調査部からの連絡事項を審議し(A)については東海区栗田、日本研山中各技官が世話人として連絡にあたることとした。

(C) 沿岸資源担当者会議長(午前)栗田技官(東海)各海区申間(午後)経過報告人J.W.ジャクソン氏の一九一七年版の *Sahells as evidence of the migrations of early culture* (pp. 216) で、この著は先年来、羽原又吉博士の垂涎するところであるが、いつまでも私がこの名著を死蔵することもあるまいと思つてゐる。

昭和三十一年を回顧して野口栄三郎

農林技術会議の要望に対する検討

午前 横田技官(南 海)
午後 中井技官(東 海)

は、東水研栗田、土井、田中、日本研山中、北水研花村各技官を専門委員として委嘱し

午後 底魚漁場形成と環境要因について
木村喜之助(東 北)

(1) 日、東京で委員会を開いて決定
以上の各発表のうち

(2) 資源研究に用いられる相似計算器について
土井 長之(東 海)

(3) 資源調査に用いられる用語と記号について
土井 長之(東 海)

(A) 明年リスボンで開催予定の北大西洋洋漁業ボビュレーション・ダンディナミック委員会への資料提供の依頼について

(B) 統計調査部からの連絡事項を審議し(A)については東海区栗田、日本研山中各技官が世話人として連絡にあたることとした。

(C) 沿岸資源担当者会議長(午前)栗田技官(東海)各海区申間(午後)経過報告人J.W.ジャクソン氏の一九一七年版の *Sahells as evidence of the migrations of early culture* (pp. 216) で、この著は先年来、羽原又吉博士の垂涎するところであるが、いつまでも私がこの名著を死蔵することもあるまいと思つてゐる。

昭和三十一年を回顧して野口栄三郎

も予想されるのでこれも次回にきめることとした。

第五回 沿岸資源調査協議会

議長 午前 内橋所長(日水産研)
午後 阿都技官(水産研)

福田技官(内海)

プロダクション・リポート発表
それにについての討論

プロダクション・リポート発表
それにについての討論

部から連絡事項を審議し(A)については東海区栗田、日本研山中各技官が世話人として連絡にあたることとした。

議長(午前)栗田技官(東海)各海区申間(午後)経過報告人J.W.ジャクソン氏の一九一七年版の *Sahells as evidence of the migrations of early culture* (pp. 216) で、この著は先年来、羽原又吉博士の垂涎するところであるが、いつまでも私がこの名著を死蔵することもあるまいと思つてゐる。

昭和三十一年を回顧して野口栄三郎

対馬暖流開発調査の伸展と共に、漁場の開発や、資源の研究は一層拡充されて、その成果も輝かしいものがあるようと思われます。一方利用関係の指導研究も益々その前進が要望されるのであります。どうしても限られた枠内で仕事が行われます関係上、地方水試の方々には、御苦勞が多かつたことと存じます。私は日本研の利用担当者も、例外ではなく、与えられた仕事をコツコツと積み重ねておりますうちに、本年はどうにか魚の鮮度保持についての一つの考え方と申しますが、法則のようないいものが得られたような気が致しました。勿論この

ような研究は、極めて困難で且つ久遠なものでありますから、今から情りを開いたようことを申上げるのは誠に神を怖れぬ不屈なことかも判りませんし、また今後研究が進むにつれて、色々と変更されるかも判りません。しかし『生きのよい魚』を得る為にも、或はまた『腐敗現象』を防ぐ為にも、これらのことを探求するのに最も大切なことは、既に市場に上った死んだ魚を材料としての研究では不充分で、どうしても生きている魚から研究を始めなければならぬと云うことを痛感致しました。また魚の鮮度保持の為の指導や、色々の処置方法も、従来行われて来たよくな、市場に陸揚げされた魚や、鮮魚商や仲買人のような陸上の人達に対する指導や処置のみでは不充分で、全画面点睛を欠くこととなり、漁業者自身に、生きた魚の殺し方から指導しなければ、その効果は挙がらないと云うことは確かな事実であると存じます。そしてこのことは北海道や内地特に北部日本海の沿岸漁業にとつて極めて大切な事実であるように思われます。私は明年度も更にこのような鮮度保持の研究を絶続しますが、また既に得られた知見をもとに、より多くの漁業者に指導普及し、『生きのよい魚』を大量に且つ安価に国民の食卓に提供したいと思つております。

次に資源化学の研究としましては、対馬暖流調査の一環として、サバの部分量や成分量の変動を、原料学的な面と生化学的な面とから採りあげて各府県水試に調査を御願いして参りました。幸いにも原料学的な面では、既に山口県等ではこれを葉書に連報して大きな効果を挙げておる山あります。その他の府県でも早くそのような段階になれますことを期待してやみませ

ん。更にまた本年はサバ体脂の沃素価の定期的、地域的の変動から、日本海のサバの系統について、何か新しい知見が得られそうな材料を得たのであります、明年は更に多くの資料を整備して、このような面からも資源解析に役立つような資料を提起したいと思つております。

以上私が本年行つた研究結果のうちの主なるものの概要を御報告致しますと共に明年の希望の一端を申上げて、一層の御指導、御協力を御願い致します。

(筆者・日本水研利用部長)

昭和三十一年を顧て

下村敏正

(筆者・日本水研利用部長)

今年度の展望

加藤源治

(筆者・日本水研開発部長)

昭和三十一年には、三月に下関で、十月に東京で、それぞれ第四回、第五回対馬暖流開発調査シンポジウムが開かれた。対馬暖流開発調査が開始されてから四年目に当り、一応暖流調査の締めくくりとするせいいもあつて、調査そのものが水試、水研を開わざつくりと軌道に乗つてきた感じである。漁場開発班、海況漁況班など、○ヶの班が作られ、各専門分野におけるグループ討論が行われるようになつたこと、及び暖流調査の取り纏めをどのようにするかということが、議題に上るようになつたことが本年の一大特色であらう。下関でのシンポジウムでは、六十五にも上る研究発表があつたことは、学会の年次大会にも勝る盛況であった。

一方日本水研でも昨年引続きて四月と八十九月の二回にわたつて日本海の沖合調査を実施したが、海況・魚卵・稚魚などの変動、分布などについて今まで知られていない新たな特徴が得られ、從來の知見を修正することになつております。

とにかく今年は過去の仕事を総括しております。(筆者・日本水研資源部長)

ていくつもりである。

このように過去四ヶ年の調査結果を基として、調査 자체が段々と精密化してきたが、一方においては、仕事に対する馴れた反面、マニエリズムに陥る懸念がないでもない。又日本海方面では水産試験場長や幹部技師の交替が多かつた為、事業の進捗主なるものの概要を御報告致しますと共に明年の希望の一端を申上げて、一層の御指導、御協力を御願い致します。

以上私が本年行つた研究結果のうちの主なるものの概要を御報告致しますと共に明年の希望の一端を申上げて、一層の御指導、御協力を御願い致します。

(筆者・日本水研利用部長)

昭和三十一年には、三月に下関で、十月に東京で、それぞれ第四回、第五回対馬暖流開発調査シンポジウムが開かれた。対馬暖流開発調査が開始されてから四年目に当り、一応暖流調査の締めくくりとするせいいもあつて、調査そのものが水試、水研を開わざつくりと軌道に乗つてきた感じである。漁場開発班、海況漁況班など、○ヶの班が作られ、各専門分野におけるグループ討論が行われるようになつたこと、及び暖流調査の取り纏めをどのようにするかということが、議題に上るようになつたことが本年の一大特色であらう。下関でのシンポジウムでは、六十五にも上る研究発表があつたことは、学会の年次大会にも勝る盛況であった。

一方日本水研でも昨年引続きて四月と八十九月の二回にわたつて日本海の沖合調査を実施したが、海況・魚卵・稚魚などの変動、分布などについて今まで知られていない新たな特徴が得られ、從來の知見を修正することになつております。

とにかく今年は過去の仕事を総括しております。(筆者・日本水研資源部長)

このように今年一年を回顧してみますと、資源部員をあげて原稿書きだけに追われたようで、春から夏にかけては底魚の経過報告作成に、その後秋までは沿岸資源とくにマイワシの全国的取纏めといつた具合だつたのです。しかし、このよな作業は十一月下旬、当所で開催された全水研の討会を以として一段落をつげましたが、マイワシの場合には来年の二月東京で開催予定は十一月下旬、当所で開催された全水研の討会を以として一段落をつげましたが、マイワシの場合は来年の二月東京で開催予定になつて、開催の終了までその結論を延べることになつております。

このことは明年を契機として相当地びしい転換を要求されるのであります。しかしながら、このままではわからないと思いますが、水研誕生以来七年を経過した現在としては一應反省する年でありますし、さらには効率的な資源研究への発展段階の発見に努めたいと存じてあります。(筆者・日本水研資源部長)